

Title	コメント3
Author(s)	酒井, 啓子
Citation	CIRAS discussion paper No.85 : 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 3 : 装いと規範 2 --更新される伝統とその継承 = Fashion and the Norms 2: Updated Tradition and Its Succession (Islam, Gender and Family in Relation with Soviet-Socialist Modernity 3) (2019), 85: 47-49
Issue Date	2019-03
URL	https://doi.org/10.14989/CIRASDP_85_47
Right	© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
Type	Research Paper
Textversion	publisher

コメント 3

酒井 啓子 千葉大学法政経学部

私はこのワークショップの共催組織である「グローバル関係学」というプロジェクトの研究代表をしています。おそらく研究代表者として何か話せということでコメントの順番を最後に回されたに違いないと勝手に解釈しましたので、まず趣旨についてお話しして、それを踏まえてワークショップの感想をお話しして、そのうえで質問をさせていただければと思います。

本質主義に陥らずに関係性から世界を考える ——「グローバル関係学」の趣旨とねらい

「グローバル関係学」は長い名前を省略したもので、これだけでは何をしようとしているのかよくわからないと思いますが、これはけっしてグローバルな関係を学ぶ学問という意味ではありません。これは単なる略称なので、まずはその趣旨についてお話しします。私は中東研究が専門で、とくに紛争地域ばかりを対象にしていますので、グローバルに影響を持つ危機的な状況が、近年多々発生していると感じます。シリア内戦もそうですし、それに伴う難民問題や、イラク戦争のように地域からグローバルに影響が出るような戦争もあります。こうした近年のグローバルな危機の現象を取り上げる際には、これまでの学問体系ではうまく説明できない。そこから始まって、関係性に焦点を当てた新たな学問的視点を導入したいと考えて立ち上げたプロジェクトです。

関係学というと、あちこちで取り組んでいるじゃないかと言われがちですが、すごく簡単に言ってしまうと、国際政治において、主体の本質を中心に見るものではなく、「関係性があるからこそ主体が浮き上がってくる」という、従来の考え方の順番を逆にした発想です。私自身は地域研究者として、アジア経済研究所で長く研究していて、イラクという国を担当していました。アジア経済研究所でしばしば地域研究者同士が自己否定的に言うのは、「地域研究者はいかに『出羽守』^{でわのかみ}にならないようにするか」という言い方をしています。つまり、とくに国別の担当で地域研究をしていると、ついつい「イラクでは」、「シリア

では」、「サウジアラビアでは」という、自分の担当国がいかにインテグリティを持った、本質性を持った実態なのかということを語りたがってしまう。かといって、それをなべて一般化してしまうと、当たり前とされていることしか残らず、すぐくつまらないものになってしまう。

その意味で、いかに本質主義に陥らず、しかしその文化的な多様性など、さまざまなものが関係の変動によって、あるいは関係の交錯の仕方によって、どう変化していくか、を見ることが重要なのではないかと考えます。あるいはこれまでになかったような主体が浮き彫りになっていくか。あるいは、それまでみなされていた主体が変わっていくか、消えていくか、そういった点を研究するのが、このグローバル関係学という考え方の中心的な議論になります。

本質を超えて歴史的・地域的な解釈がなされ 関係性をみる際に恰好の材料となる「装い」

そのような関係性をいかなる手法を用いて分析するかについては、さまざまな方法論があるわけです。たとえばビッグデータ使ってネットワークを解析するというグループもあります。このB01の「規範とアイデンティティ」班では、シンボルやモノに象徴されるものを取り上げて、そこから浮き彫りになるさまざまな関係性の変化を見たいと考えています。とくに装いというのは、本当にその典型だと思っています。本日の報告も、みなさんそれにすごくよく合ったご説明をいただいたと思います。

というのも、私はイスラーム圏を研究していますが、スカーフ1枚、ヴェール1枚を採ったとしても、それが持つ意味というのは社会関係のなかで浮き彫りになるわけで、ヴェールそれ自身に意味があるわけではありません。日本における一般的な質問で、「ヴェールはなぜかぶるんですか」と、よく学生さんなどから聞かれますが、ヴェールそのものに何か本質的な意味があるように思われるわけです。しかしそうではなくて、それがさまざまなコンテキストのなかでいろいろな意味を付与されて、歴史的にも地

域的にも違うところで解釈されていく。「装い」はその部分を見ることができるともいい材料だと思っています。このワークショップをととても楽しみにしています。

近代性やナショナル性が 複雑に絡み合った存在としての「キモノ」

その意味で森先生の話は、「まさに」という感じでお聞きしました。ですから質問ではなくコメントとして申し上げますと、日本のキモノが民族服として、植民地支配のツールとして向こうに行ったという話はとてもわかりやすいのですが、同時に、行った現地ではそれが一つの近代化の象徴として受け取られていた。これはある意味では、ヨーロッパの洋服と同じですよ。西洋風の服装を着ることが近代化である。べつにイギリスにおもねるわけではないけれど、それを着ることで自らを近代化させる。ですから、頑固な反欧米ナショナリストも洋服を着ていたりするわけです。こうした近代性やナショナル性など、さまざまなものが交錯する、混ざりあうかたちで、キモノというものが外地でどう消費されて、どのように解釈されたかという部分が、とても興味深いと思いました。

先ほどの質疑応答でキモノが現地生産なのかどうかを聞いたのは、そこなんですね。現地社会において、ヨーロッパからの洋服のように、強制されたものではなく、積極的に「自分たちもあいう近代化された服装をしてみたい」と思って生産するメカニズムがあって、そして現地の人たちが手に入りやすい値段で入手できるまでになったものなのか。それとも、「やっぱり植民地発信のものだから、もういらないや」という話になったのかという意味で、先ほど質問させていただきました。とても勉強になりました。ありがとうございました。

パルダにおいて男子学生の存在と学歴の関係は —— 賀川報告について

あとのお二方には質問です。帯谷先生から賀川さんに質問があったパルダの話は、私も聞きたかった同じ質問です。ヒンドゥー教でも意味が違って同じように使われていると言っていたので、「イスラーム的だ」と思われている服装のコードが実は別のものだったり、別のものと交錯したなかで違うバージョンになったりということがあるのかと思ったので、

同じ質問をシェアいたします。

関係性に関連して、賀川さんにコメントです。インタビューをされたときに、グループ・インタビューと単独インタビューがありますね。そこで回答がどう違ったかが、とても重要だと思います。というのは、「みんながスカーフをかぶっていないところで私だけけているのもなんだから、大学では脱ぐわ」という話ですよ。ということは、本当はかぶっていたいけれども、「そんなものには大して重きを置いてないわよ」というグループと一緒にインタビューされたなかで答えたら、「私も脱ぐのよね」と言うと思います。まとめてインタビューするグループ間の関係や男女比など、コンテキストでインタビューの回答は絶対に変わりますので、その点は注意して、分析を分けたほうが良いと思いました。

また、すごく興味深いと思ったのは、後藤さんもそうだと思いますが、中東の文脈で言うと、中に着ているのはピチピチのTシャツだったり、お尻の線がバッチリ出たようなジーンズだったりしますが、ヴェールの脱ぎ着というのは、あまりないですよ。そういう人には会わない。中東では、スカーフだけは絶対に朝から晩までずっとかぶっているけれども、逆に中に着ているもののほうがダブダブではなくなっていくという変化を起こしている。ですから私は衝撃を受けたわけです。

大学内であっても、朝していたスカーフを脱いでしまうことには抵抗がある。私自身もそうでした。私自身は、カイロの町中を歩くときはスカーフをかぶりますが、人の家に入ったら脱ぐ。「なんちゃってムスリムだよ」と笑われていたのも、そのあたりがコンテキストによってまったく違うというのが興味深いなと思いました。

あと、これは質問ですが、大学内ではスカーフを脱ぐという答えですが、写真を見ていると女子大生が多いですね。これは男性がいても脱ぐのでしょうか。それも、女子大生ばかりだと脱いでしまっただけになるということがありますが、そのビヘイビアの違いが、男子学生がいても同じなのかどうなのか気がなりました。

最後の質問ですが、賀川さんの調査では、大学に行っている女子大生、高学歴を対象に聞いたとおっしゃっていました。それとは別に、地方から出てきて、もともと地方でスカーフをかぶる、ゆったりした服装をするということが当たり前とみなしてきた人た

ちが大学に行って変わっていくのではなくて、都市には仕事で出てくる人たちがたくさんいるわけです。そういう人たちは、それほど高学歴ではなくて、中ぐらいの人たちが多い。そういう人たちも同じ感覚なのか、その人たちのビヘイビアはまったく違うのかという比較は、ぜひしていただきたいと思います。先ほど言った「ヴェールだけは絶対外さないよね」というのは、どちらかというと後者のパターンが多いと私は思っていたので、そのあたりについて今後の調査でわかれば興味深いと思いました。

トルクメンの服装にトルコと外国人労働者の影響は——岡田報告について

岡田さんの話も本当に興味深いものでした。私はイラクを研究していたので、社会主義下、統制下のイスラーム社会がどうなのかという点については、パラレルに聞こえるところがあってとてもおもしろかったです。とくに民族をまとめるために一つにしたという点も、「イラクの民族政策と同じようなことをやっているんだ」という感じで興味深く思いました。

3点聞きたいと思います。まずは簡単な質問からです。基本は世俗ですよね。イスラーム性が薄いということが徹底されていると思いますが、国旗を決めたのは独立以降で、そこに緑を使っていますよね。国旗に緑を使うのは、かなり意図的にイスラームを意識した色の選び方だと思います。緑が選ばれたという点が繰り返し出てきて、そこにはものすごくイスラーム色を感じますが、その背景はどのようなのでしょうか。パキスタンにしてもサウジアラビアにしても、国旗が緑一色の国は相当イスラームを強く謳っている国です。ですからそのあたりについてうかがいたいと思います。

あとの二つの質問は、先ほど話した関係性に関連したものです。国内の話をもっぱらされましたが、最後のファッションの動画を見たときに、「こういう映像はトルコでしょっちゅう見たぞ」という感じの映像でした。トルクメニスタンですから、文化的な影響はきっとトルコから相当受けていると思います。いくら永世中立でかなり閉ざされた国だといっても、ファッションの変化にトルコの影響はどの程度あるのか。しかもトルコは、先ほどの話ではありませんが、イスラーム化と世俗化との間を行きつ戻りつしているわけです。その行きつ戻りつのトルクメニスタンに対する影響、トルクメニスタンでどのようにトル

コに行きつ戻りつを受容しているのかという点が知りたいと思いました。

最後に、これも関係性に関連しますが、トルクメニスタンは石油産油国として、言ってみれば完全にレンティア国家で、国民がすごく裕福ですが、外国人労働者はいないのでしょうか。湾岸諸国でよく言われるのは、外国人労働者と国民がかなりセグメントされていて、外国人労働者からの文化的・社会的な影響を国内社会がいかに受けないようにするか、社会を分断するのが重要です。

たとえばかつてのサウジアラビアは、うっかりパレスチナ人やシリア人などの外国人労働者を使っていました。それによって、世俗的な思想が外国人労働者から本国の国民に入ってくるという影響を受けていました。その観点から、もしトルクメニスタンに外国人労働者が入っているのであれば、そこからの思想的・文化的・社会的な影響性が資料のなかでは見えなかったもので、何かあるなら教えていただきたいと思いました。